

を得るが、この兩者を比較綜合する時、その何れもが狩野、海北及び雲谷の何れにも歸し難きものであると考へらるゝが故に、消極的に長谷川一流の作と考ふべきかとするのみである。その製作年代の如きも、固より確實な資料を缺いて斷を下し難いが、言ふまでもなく所謂桃山時代障壁畫の粹なるものとして到底寛永以降の作とは見難く、慶長を遡る幾ばくなるべきか問題の分るゝ所であらう。されども更に細敘すべくんば、當期障壁畫の大觀をなすと共に、細部の時代區分と、その特質論に入らざるを得ざるを以て、今は略慶長頃の作と見るべきかとする推考の結果のみを記するに止める。

因に言ふ、櫻楓圖には尙櫻圖一面、楓圖二面の殘缺があつて、之は現在八面の櫻楓圖と接續せざる部分に貼付として建てられてゐる。(正木)

三 毘沙門天圖

京都 知恩院藏

綾本著色 挂幅装 竪一一・〇〇(三尺六寸六分)
横五五・二〇(一尺八寸二分)

毘沙門天の畫像はその彫像の豊富なるに比しては遺品甚だ尠く、殊に此の知恩院藏本は綾本である點に於て佛畫中の一異例に屬する。

由來毘沙門天は胎藏界曼荼羅に在つては外金剛部院の北方門側に侍し、金剛界曼荼羅にあつては西方に位して藥叉の主となる。その形相に就いては經軌の指すところ、遺品の示すところ多様であるが、今本圖に於て之を見るに、粗通途の如く、被甲著冠左手に寶塔を捧げ右手に三叉戟を執るが、唯畫像の諸例の二或は三邪鬼を踏めるに對し之の方座上に一邪鬼を踏んで立てるは稀らしく、又更に四藥叉の侍立せる點に特異を見出す。此天が數人の侍者を従ふる例は四天王の一としても古圖像中に在るが、他方藥叉八大將羅刹天女等を従ふる所謂毘沙門曼荼羅の如きも遺存する。想ふに斯の四藥叉は藥叉八大將の半數を省略して圖繪せるもので本圖或ひは毘沙門曼荼羅の一種とも考へ得るであらう。

本圖惜むらくは斷爛補絹隨所に多いが猶造顯當初の趣致を窺ひ得るは最も喜ばしい。打見るところ先づ渾厚の畫致に古様多きを想はせる。毘沙門の相好は

二四

藥叉の主たる威嚴を表はしつゝ、しかも藤原期憤怒尊通有のおほどかなる趣を襲へるものと知られ、又同じ時代の好尚は猶その華麗なる天冠、寶塔の制式、衣服細部の文様、さては豊かなる五彩の賦色殊に縹緗風の彩色等隨所に指摘し得て、本像に藤原的要素多きを知るが、尙藥叉の様式に於ても亦古様を認める。乍然、更に翻つて衣裝の端々例へば鰭尾、廣袖、裾、脚部の衣の衣文の描寫に顧る時、つとめて丸味を避け、好んで尖削に就く手法の如き、もとより藤原に遡つて考ふことは不可能であり、殊にその描線の性質の乾硬なる感覺に至つては尙更に彼に隔る時代を想定せしむるに十分なるものがある。想ふに本圖は鎌倉期も半ば過ぎ藤代の一古本に據つて摹圖せられたものであらうが、此期に於て此秀麗なる作を遺せるは注目すべく、茲に本圖の特色を見出す所以である。かく考へ來る時、又かの天冠、寶塔の制式の古様なるにも似ず、金剛莊嚴の甲冑と共にそれが箔押にはあらで泥描なる點に就いても亦首肯し得る。尙用絹は四菱入襷格子の綾文を有するが、寡見にして他に同様なるものあるを知らぬ。

(梅津)

四 馬賁筆百雁圖

布哇

ホルル美術館藏

紙本墨畫 卷子装 竪三四・五〇(一尺一寸四分)
横四四・五〇(一丈五尺)

(矢代幸雄「馬賁百雁圖卷」参照)

(寸原) 印款圖門高公于筆山峯

昆
沙
門
天
圖
部
分

京
都
知
恩
院
藏